

死線を越えて

賀川豊彦

著者略歴

賀川 豊彦（かがわ とよひこ）

1888年 兵庫県に生る

明治学院高等部神学予科から神戸神学校を卒業、プリ
ンストン大学神学部卒業、日本基督教巡回牧師、社会
事業労働運動、全国農民組合長、社会党顧問

《著訳書》「新版一粒の麦」「爪先の落書」「人生ノート」「キリ
スト山上の垂訓」ルコント・デュヌウィ「人間の運
命」

1960年 没

〈お願い〉

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速
お取替致します。

© Sumimoto Kagawa 1983

Printed in Japan

現代教養文庫 1101 死線を越えて

1983年 9月30日 初版第1刷発行

著 者 賀 川 豊 彦

発 行 者 小 森 田 一 記

発行所 株式 社 会 思 想 社
会 社

東京都文京区本郷1の25の21

本 社 (03) 813-8101

営 業 (03) 813-8105

振替東京 6-71812 〒113

現代教育文庫

1101

死線を越えて

賀川豊彦 著

社会思想社

死線を越えて 総目次

死線を越えて

太陽を射るもの——続・死線を越えて

壁の声きく時——続々・死線を越えて

解説（尾崎秀樹）

死線を越えて

私は、不思議な運命の子として、神聖な世界へ目醒めることを許された。そして、人間の世界の神聖な姿と、自然の姿に隠れた神聖な実在を刻々に味うことが、私の生活のすべてになってしまった。二十二の時に、貧民窟に引きずられたのも、この神聖な姿が、私をそこへひきずって行つたのだった。そして、私の芸術も、この美を越えた聖、生命の中核をなす聖なるものを除いて何もでもない。

一

東京芝白金の近郊に谷峽が三つ寄つた所がある。そこは、あちらもこちらも滴るばかりの緑翠で飾られているのでただ谷間の湿っぽい去年の稲の株がまだ覆されていない田圃だけに緑がない。

大崎の方に寄つた谷の奥には大きな雲の上に出るような大杉が幾十本となしに生えている。そこは池田侯爵の屋敷である。白金の岡にはお寺が一軒二軒、中の岡には屋敷もなければ寺もない。細い栗、檜、櫟が三十本六十本と生えている。

五月の初めであつた。ある日本晴れの日にこのまん中の岡の森蔭に、草を敷いて横になつて、本を読んでいた者があつた。

見ると、背は普通より高い、瘦形で、黒羅紗のチャンとした正服を着ている。

たしかMGを組み合わせた金ボタンをつけ、顔色は非常に青く、鼻は高いが、頬骨が少し出ている。目はどちらかというと、大きくて鋭い。しかし気高い輪郭の持主であった。

この男はいつもここに来る男だが、近ごろはここへ来て本を開いても別に読もうともしておらぬ。

ただ目を閉じて黙想をしておる。しかしこれもあまり長くは続かぬ。すぐ眠ってしまった。が夢が醒めるとまた急いで本をかき開いて読む。三、四行のところを繰り返し繰り返し読んでいて、こんどは急いで畔道を伝って白金の方に飛んで帰る。

今日も彼は例のごとくここへやって来て、例のごとくやっていた。

その時彼のねている頭のうえの細道からだんだん降りにおりて来る一人の二十前後の青年があった。小薩張りとした紺の衣服に真岡木綿の黒の兵古帯をしめ、烏打帽を冠ってステッキをついていた。

彼は背は高くないが骨格の逞しい眉の濃い髯の多い、赤い顔した男だった。彼は散歩の帰り道である。

ふと洋服を着た男が横になって本を読んでいるのを見たから、急に立ち止まって声をかけた。

『新見なんしてるか？ よせ、よせ、よせ！』

『ア、鈴木か、どこへ行っていたんだ？』と本を読んでいた男は叫んだ。

『僕か、僕は目黒の不動さんの方へ行っていたんだ。君、この春色^{しゅんしよくたいぜん}駭然たる時に古臭い本なんか読むな、僕は君がこんな所でぐずぐずしているのを知っていたら、目黒の方へ連れて行ってやるんだった。新見また今日も煩悶^{もんもん}か？』

『馬鹿！』

『何だその本は？ 哲学か？ よせ、よせ』と彼は歩^{あし}を運んで新見の傍に腰を降ろして、彼が小笹^{おささ}の上に捨てた洋書を取り上げた。

『何だこりゃ？ Upanishedと発音するのか？ ウム。The sacred books of the Eastって何だいたい？』

『これか、これは紀元前千三百年から六百年の間に出来ただろうという印度^{インド}の經典^{きょうてん}だよ、君、知らぬか？ リグ、バタって。昨日、上村の仏教史の講演にちよつと話していたじゃないか』

『ウムあれがどうした？』

『あれから、これが進化したのだよ』

『面白い物読んでいるな。僕など学科の準備にあくせくしているばかりで、外の本を読む暇なぞないがア。君は感心だな。内容はどんなものだった』と今まで本の体裁ばかり見ていたが三十頁もあると思う序文をめぐって大きな文字で印刷してある本文から読み始めた。

『すべては梵^{ぼん}なりか？ 世界は梵の中に始まり終わりまた呼吸するものなるを默想すべし……か、アハハ……汎神論か？ しかし、面白いことをいうね』

鈴木は本を閉じながら、

『新見君しかし、君は、この本のいうところを真面目に信ずるかね。こんな昔^{ぼなし}の汎神論を？』と問うたが、

『なに君等子供にはわからないよ。印度哲学の一冊でも読んで、そんなことを聞いたまえ。近ごろの子供は印度哲学の一冊も読まない癖^{くせ}に生意気なことをいう。まだ超越しない中は駄目だよ。大いに超越して解脱^{げだつ}した者がはじめて汎神論とか何とかいい得るんだ』鈴木は新見の一年下だ。

『それでも君常識から考えても因果律と物質は同一じゃあるまいし、すべての物を統一する者が切れ切れになるなら、統一も何も出来ぬじゃないか？』新見は一本突き込まれた。

『スピノザでも研究してみたまえ。科学的頭脳を持つている者がだれが馬鹿らしい創造論などを信ずるものか。しかし君は熱心なクリスチャン、しかも伝道の準備に学院に來たのだから、あえてスピノザ気取るのじゃないが君の信仰を迫害せんさ。勝手に神様を創造したまえ。しかし物質不滅や勢力保存や進化論を信じている二十世紀文明が馬鹿らしい天地創造論などを信ぜられるものか』と真面目に論ずる。

『君、そうだけれども、物質不滅だって勢力保存だって進化論だって皆仮定だろう。信仰だ

ろう。僕等はまだ知らんさ。しかしそれは自己の演繹えんぎで決して帰納ではないのだろう。僕は論理学でちよつとそのようなことを読んだことがあるが……」

『しかし、ヘッケルを——君は読んだことがあるかね？ 一元論さ。物質精神一体両側面説さ——我等は無限に進化しつつある者すなわち神になっているのだ？』議論はいつしかまったく真面目になった。

『君それじゃ死ねば人間はどうなる？』

『死ねば分子さ。何も不思議なことはないじゃないか』

『滑稽だな——神様がまた分子から復習するのか？ 君それじゃ進化が退化になっているだろう！ 道徳も芸術も夢だな』

『君はわからんから困る！』

『とにかく、もう四時だ、三十分すれば、飯が食えるよ、そろそろ帰って行こう、だいぶん日は理屈を並べたね』と鈴木は時計を見ながらいった。

『それじゃ帰ろうか？』と立ち上がった。洋服についていた塵を払って、細い畔道あぜを鈴木を先に立てて新見は帰って行く。二人は丘に沿うて回り、水車場の辺りを上がり、森の垣根に沿うて歩んだ。鈴木が問うた。

『君仏教は今日の科学的信仰と同じことをいうじゃないか。それに君はなぜ明治学院などに入ってきた？ 仏教大学にでも入学すればいいに』

『僕はそれだから哲学の方面からいえば仏教を取るが、しかし仏教は駄目だよ！僕は十七、八くらいの時から哲学じみたことがすきでずいぶん苦悶して歩いた方だがね。……十五の時に国の中学の三年が終すんですぐ東京へやって来て、あっち、こっちの中学を漂泊したさ。その間は教科書などは少しも手につけずに詩や哲学や雑誌を朝から晩まで読んでね、ずいぶんそれは苦悶したものだよ。僕は高輪たかなわの仏教中学を卒業したのだよ。君は誰からか聞いたかい』

『いや、聞かなかつたが。——それじゃ君は小さい時から哲学が好きだったのだね。君、いったいどうして哲学が好きになったのか？』

『なに、一つは母と十歳の時に別れて、継母に養育せられたのと、僕が国を出るといふ動機が、姉の死というのにあったのだからね。自然僕の心が哲学に向いたと見えるね。そうだろう、君のクリスチャンになった動機を聞いたことがあるが、君だって三陸かいしやうの海嘯に父母兄弟を失わずにいて人生を疑うことがなければ信仰とか神とかいうものを問題にしなかつたらう？』

『そらそうだ。君は高輪中学にいたのか？面白い所にいたのだね。駄目か、仏教は？』

『駄目だね。僕は宗教学校に入つて僕の疑問を取り去つてもらおうと思つたがまったく駄目だね。かえつて苦悶を増して来たさ、彼等の内幕を悟つたから』

『そうかね？』

『僕は鎌倉の建長寺へ参禅したこともあるが、馬鹿らしいよ、禅というのも。このごろだ**い**ぶ禅が流行しているようだが君、仏教というのは真に禅のよ**う**なものだね。輪郭ばかり残し

て色彩を消そうというのさ。だから鎌倉何十の寺院これ皆貸屋さ。君来光寺の本尊が売物に出たということはこの間の新聞で見ただろう。あれは運慶の名作でね。彫刻家の喜ぶものだがね……仏教は道徳だとか人格だとかいうものはまったく否定しているのさ。そして言葉で愚婦愚夫を欺いているのだ。駄目さ。肉と血の躍るものが信ずるものじゃないな』

『まったくだね。本願寺の失態なども、馬鹿氣しているくらい墮落しているからね。君それではどうして明治学院のような所に入るようになったんだ？』

『僕の父がね僕に強いて法律を研究せよと勧めて一高にいたのさ。しかし三年の一学期という時にね。急に咯血してね——僕の母も姉も肺で死んだんだよ——医者が肺だというじゃないか。茅ヶ崎で一年と八丈ヶ島で一年遊んでね。今度はもう法律などをやる勇氣はないじゃないか。非常に宗教的に傾いてね。仏教の方も飽いていたから。明治学院の高等学部で二年遊ぼうと思ってね、去年の九月、明治学院へ来たのだ』

『君明治学院はどう思う』と鈴木は新見の顔を見て尋ねた。

『僕は実際、基督教キリストというのは、もう少し愛に満ちているものだと思っていたがなア』と新見は答えた。

『しかし僕は明治学院へ来て特別にそう感じたね。しかし新見君、田舎のクリスチャンは東京の信者と同様だと思ったら間違っているよ。真のクリスチャンは田舎の隅の無花果いちじくの樹の下で神の国の夢を見ているナタナエルだよ』

『僕は基督教キリストの熱烈な歴史が今の信者の中にはわいていないように思うよ』

『実際僕だって痛切にそれを感じているのさ、戦争の時に……会などを開く今の信者だからね』

『使徒時代の夢はいずこにか消え、肉を十字架の上に割いたその熱烈と輝きもいずこにか消えたね』

『実際だね。僕もそのためには祈っているさ』

『しかしついに経済問題さ。ね鈴木君、君、この間僕と平野の討論を聞いたかね。文学会の時に!』

『君は幹事にしかられたそうじゃないか?』

『やられたさ。しかし君、およそ精神界のことは陰の表象を取らなければ人間というものには感応がないだろう。基督教だって、アメリカと英国のコンモンウェルス造らなくて、シナ帝国のようなものを造ってばかりいれば何の価値もないじゃないか。そうじゃないか? キリスト教というものが今日の社会主義思想を産んだが、サン・シモンやフエリエルは使徒時代ののような世界を實現さそうとしたのだよ。まったくだよ、キリスト教が社会主義思想の表象を取らなければ……。それだから僕は幹事にそういったのさ、帝国主義に、あなたの学校で教育なさりませ。しかしそれはキリスト教じゃございませぬよって』

『君がそういうと、幹事はどういった?』

『そしたらね。とにかく文部省の方から社会主義を学生間に宣伝する者があれば嚴重に取り締められているから、君もこの学校にいる間はあのような猛烈な破壊的な演説を講壇に立つて大勢の前ではしてくるな』

『……。僕はキリスト教と国家とは決して一致するものじゃないと思っているがね。僕は社会主義をまったく賛成は出来ぬが、今日の日本の信者が国家とキリスト教とが相衝突せぬといつて弁護しよう、弁護しようといっているのがおかしくつてたまらぬのだ。彼らは皆キリスト教信者が……追い出されることが恐ろしいのだね』

『馬鹿だよ。世界的のクリスチャンが何にも井上哲次郎や加藤弘之のような曲学阿世きよくがくあせいの徒を恐れて国家とキリスト教の衝突を弁解しなくても、国家とキリスト教とは衝突する。衝突するが真理は宗教にあるといい切ればよいのだに』

『……………』

こんなに話が先から先へと花が咲いたが、二人はなお屠牛場の横を歩いて大きな杉の木が両側に生えた道を白金の方へ歩んで行った。その時話がだいぶ切れていたが鈴木は、

『君はなかなか面白い経験を持っているね』と口籠くもるようにいうた。

杉の間を通りすぎて右へ曲ろうとした時に、後から声がする。

『鈴木——』

『新——見』